心に寄り添うグリーフサポート

●【孤独という社会問題を認知する】

貧困格差が広がる日本ですが、遺児・孤児やその家族へのケア（配慮・気配り）も大きな社会問題の一つです。ご存知でしょうか？日本に遺児・孤児と呼ばれる子供達が実に四十万人もいると推計されている現実を・・・。かけがえのない親を亡くし、孤立している遺児・孤児達は、経済的にも精神的にも、追い詰められている事実がこの日本に厳然とあるのです。平成七（一九九五）年に発生した阪神淡路大震災をはじめ、平成二十三（二〇一一）年の東日本大震災という未曾有の天災により、震災孤児・震災遺児と言われる子供達が現代日本で浮き彫りにされはじめました。

「震災孤児」とは、両親が死亡、ないしは一人親家庭の場合は、片親が死亡した児童のことを言います。また**「震災遺児」**とは、両親のどちらかが死亡した児童のことです。日本では平成十（一九九八）年以降、平成二十三（二〇一一）年まで十四年間という長きにわたって、三万人を超える自殺者（以下、自死者）を出してきてしまいました。一口に「年間三万人」と言えど、一人一人の尊い命があり、家族があり、人生があった事に、同じ人間として、現代を生きる同じ日本人として思いを馳せなくてはなりません。

「年間三万人」というのは一日平均八十人以上という計算になります。言うに言われぬ悲しい現実が十四年間だけでも四十五万人に上ります。日本で家族を自死で亡くした遺族は三百万人を超えると推計されています（※警視庁発表）。

自死者が三万人を超える今日、遺児や孤児家族は親子ともに心の問題が深刻です。特に自死の場合は突然の死というショックと共に、本当の原因が分からない為に生じる親に対する疑心暗鬼や「自分のせいで死んだ」・「自分は何もしてやれなかった」という自責感、「自分は捨てられたんだ、愛されていなかったんだ」という恨みや失望感などに苛まれ、この上ない喪失体験となります。更に、世間の目に対する怯えが追い討ちをかけます。家族や親戚から「親が自殺したとは決して言うな」と口止めされる一方で、「周囲に知れたらどうしよう」という不安の中で、ついに誰にも心を打ち明けることもなく孤独に陥っていくのです。

●【震災遺児や孤児の現実】

親の死や障害以降に不登校や登校拒否が始まったり、気分が沈み、気が晴れない。怒りっぽくなった。無気力になった。いじめを受けた。精神的な面で追い詰められてカウンセリングや精神科などに通院し始める。また、自分は価値のない人間だと思ったり、絶望的で自殺や心中を考える事もあるという様に、抑鬱的な心の状況が作り出されていきます。経済的基盤のみならず精神的・文化的な支えを失ってしまいます。昨日まで当然だったことがそうではないと知らされ、大切な人の存在が「もろいものだ」ということなどを突きつけられます。あるいは、癌などの病気を患った親の長期の闘病生活を共にしている子供は、迫り来る死に怯えた経験をしているかもしれません。逆に子供に心配をさせまいとする周囲の大人達の配慮から何も知らされず、結果的に突然のように親の死を告げられた体験を持つ遺児もいます。

●【グリサポとやま】

そんな子供達や親御さんの心の支えともなるべく、富山県内の同志達と共に、昨年**「グリサポとやま」**を発足しました。スタッフメンバーは宗教者・福祉・医療（心療内科）・心理カウンセラー、更に遺児家族の親御さんで結成しました。グリーフトレーニングを受けたスタッフが子供の心に寄り添って、胸の内に抱えた思いに耳を傾け、受け止めることを大切にし、少しでも遺児・孤児の心に寄り添い、健全な心を育む切っ掛けの一つに繋がることを念願しています。

■「どんな子供達が集まるのか？」

親や大切な人との死別などの喪失体験をし、グリーフ（悲嘆・愛惜）を抱えた子供達です。

■「どんな事をするのか？」

遺児の子供達およびその家族に対して、グリーフサポートやソーシャルサポートに関する事業を行うことにより、彼らのQOL（生活の質）の向上と社会との結びつきを図り、もって子どもとその家族の未来の質（QOF=クオリティオブフューチャー）の向上と、広く支え合う社会づくりに寄与することを目的にした活動をしています。

「グリサポとやま」の母体は**「あしなが育英会・仙台レインボーハウス・子どもグリーフサポートステーション」**です。病気や災害、自死（自殺）などで親を亡くした子供達や、親が重度後遺障害で働けない家庭の子供達を物心両面で支える民間非営利団体で、国などからの補助金・助成金は受けず、すべて寄付金で運営されています。「グリサポとやま」をバックアップする主体は▼防衛医科大学校看護学科・精神看護学教授の髙橋聡美さん。▼あしなが育英会レインボーハウス・子どもグリーフサポートステーション代表の西田正弘さんらです。

●【今できること】

先月の二月六日に、仙台市の「子どもグリーフサポートステーション」へ体験研修に行って来ました。そこは私の想像を遥かに超える規模と実績を誇っており、有意義で、かつ実

りある体験研修となりました。私的には、「**グリーフサポートは文学だ。子供の物語は一人一人違う。一人の子供は何万ページにも及ぶ人生の物語を持っている。その人生の物語を紡ぐお手伝いをさせていただくのがファシリテーター（サポートする大人達）の役目だ。**」という言葉が胸に刺さった。参加し集う子供達は全員が遺児であり孤児です。そんな子供達が、様々な思いを抱いて何気ない顔で、強い心で日常生活を送っている中で、本来の子供らしさを取り戻す時が、この場所なのかもしれないという確信を得ました。

北陸で唯一のグリーフケア専門の組織「グリサポとやま」が、いよいよ始動します。日程と場所は以下の通りです。

▼《場所》…真成寺（研修室など）
《日時》…六月五日・十月十六日
二月十二日。
▽《場所》…おとぎの森「森のふれあい館（高岡市佐野）」
《日時》…四月二十四日・八月二十八日・十二月二十五日。※《時間》十三時～十六時《参加費》三百円。

平成二十八年度は以上の予定で開催いたします。詳細などは、真成寺にお気軽にお問い合わせ下さい。

「グリサポとやま」の集いに参加できるような遺児・孤児は、全体のほんの一部です。皆様の周りに悩みを抱えていらっしゃる遺児・孤児はおられませんか？本当に手助けが必要な人達は、表に出てこずにうずもれています。そんな子供達にも「ここにこういう場所がある、活動がある」事を繰り返し発信し続けなければなりません。精神的なものや、進学、親の貧困など子どもを取り巻く問題はさまざまで、単独で抱えきれません。私的には、多くの官民が連携して子どもの健康改善に取り組んだり、教員関係者に外部の支援組織を周知したりしようとする動きを強化し、学校、行政、民間同士のつながり直しがこれから必要だと考えます。親やきょうだい、友達など大切な人を亡くした子供達に寄り添い、心のサポートをさせて頂く為に設立された「グリサポとやま」の存在意義がそこにある。一人の子供が育つには村中の人が必要です。

最後に、仙台の体験研修での一幕です。東日本大震災でお父さんを亡くした子が声にならない様な小さな声で言いました。「お父さんの肩車が大好きだった…」と。とてもお父さんの代わりにはなれないが、涙を堪えながらいっぱい肩車をしてあげました。

合掌　副住職　谷川寛敬

ご招待

第7回ホール・デ・コーラス
とじょっこコンサート
が開催されます。

と　き…四月十七日（日）
　　午後二時開演
場　所…新川文化ホール
　　（大ホール）

私達のコンサートは、二年に一度開催され、プログラムは、ホール・デ・コーラス版のオペラが組み込まれています。

今回は、モーツアルトの「魔笛」です。私は何と「夜の女王」役です。夜を支配する女王。最後は、雷に撃たれて死んでしまいます。（可愛そう！なぜ私がこの役？地で行けるから！という声が聞えてきそうですね《苦笑》）

皆様に喜んで頂けるプログラムになっています。

メンバー心ひとつに頑張っております。一人でも多くの方のご来場をお待ちいたして居ります。

チケット御座いますので、お申し出下さいませ。

お待ちいたして居ります。